

Title	エミール・ジヤム著 久保田明光・山川義雄訳 経済思想史
Sub Title	
Author	原田, 敏彦
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.4 (1967. 4) ,p.459(109)- 460(110)
JaLC DOI	10.14991/001.19670401-0109
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670401-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論点が顯著にあらわれていると思われるジョン・オウエン、ジェームズ・ハリントンの思想についてのみ紹介する。

著者が従来顧みられることの少なかったジョン・オウエンを、ピューリタニズムの思想家としてとりあげたのは、オウエンが一貫して革命の主流にあつて、純粹にカルヴィニズムの教義を守り続け、更に体系的な著作を残したからである。オウエンの救済論の大前提は神の支配の絶対性である。彼の救済論の一つの支柱である「信仰のみによる義認」において、信仰のしめる位置は、特殊なものである。もし信仰が「救済の条件」であるならば、人は信ずることによって救われることになり、救済の条件は人間の側にあることになる。これが神の支配の絶対性と予定説に矛盾することは明らかである。オウエンの場合、救済の原因はあくまで神のうちにあり、信仰は条件ではなく、救済にいたる手段あるいは道具因 (instrumental cause) である。人は信ずることによって選ばれるのではなく、選ばれているからこそ信ずるのである。……

予定説の決定論は、オウエンの場合には、マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で、「救済の味を持ち得たからであった。」

第三章「経験論の思想」におけるジェームズ・ハリントンは、一六五六年に公刊された『オシアナ共和国』の序論後半において、土地所有関係の変動と政治形態の変化をイギリス史について跡づけ、封建制の成立、絶対王政の成立、修道院解散以降の平民の土地所有の増大、そこから必然的に生まれる政治形態の変化、絶対王政の崩壊、市民革命の必然性を説いた。彼にとって、旧体制復活の試みは無意味であり、共和制の安定こそとるべき唯一の方向であった。

ハリントンは人間の主体性と自由は必然性を理解し、そのなかに自からの行動を定めることにあると考える。しかし、彼が『オシアナ共和国』で革命の必然性と共和制の樹立を説いた一六五六年には、なお政局は動揺を続けていた。彼が歴史の必然性の名のもとに説

「普遍性」を主張しつつ、しかも「倫理的にみて予定説の決定的な点」は守ったとしたリチャード・バクスターよりも論理的に一貫したものであり、峻厳である。オウエンの考える人間の意志の自由とは、神の意志に従うことであり、人間のなし得ることは、ただ神の支配を信ずることのみである。

それではオウエンの「予定説」、「信仰のみによる義認」は行為の軽視や宿命論を意味するのであるか。彼は、救済は信仰によってのみ与えられるのであるが、信仰がそれだけにどまっていたのでは救いにいたることはできないと考える。「潔白、行為、成果をともなわなないような信仰はむなし」という彼の言葉は、オウエンにおける「神の支配の絶対性」が、人間の主体的努力 (善行、聖書の遵守) の場を全く残さないものではないことを示しているのである。

この他方、オウエンは選ばれざる人々の破滅と永遠の苦しみを断言する。だが、神のえらびは「神のかくされた意図」であり、誰が救済に予定され、誰が破滅に予定されているかを人間が知ることはできない。ここで予定説は、目的と手段の転倒を生む。救済という窮極の目的はおおいかくされて、手段であつ

いたのは、実は旧国王派までふくめた形での政局の安定であり、妥協的な革命の終息であつた。

オウエンに見られた神の支配の絶対性が、逆説的に現状変革の力と主体性を生みだしたのに反し、ハリントンの歴史の必然性と決定論の思想は現状肯定的、保守的であつた。市民革命期の経験論の歴史的性格は、革命の主体的推進力となることであつたのではなく、その成果だけをつみとろうとする階層のイデオロギーたることであつたのである。

本書は著者のイギリス市民革命史研究の三部作、「革命史」、「革命の思想構造」、「革命の経済構造」の第二部にあたるものである。いづれ第三部の完成をまつて、イギリス市民革命の統一的全体的分析が刊行されるものと思われ。

尚、最後に蛇足ではあるが、本文第四章一五五頁六行目の「ヘンリ・クロムウェル」はオリヴァー・クロムウェルの誤りではなからうか。護国卿のクロムウェルは、オリヴァーかその子リチャードである。(未来社・一九六六年十一月刊・A5・本文二七八 著作目録二一 索引八頁・一四〇〇頁)

一安元 穂一

た信仰や善行が目的化され、救済は結果となる。こうして予定説をもたないカソリンズムやルター主義が信仰を救済という目的のため手段とみなし、そこに打算、偽善が入りこみがちなのに反して、オウエンの場合には、目的化された信仰や善行は矮小化を免かれるのである。

さて、著者はカルヴィニズムの予定説が「個々人のかつてみない内面的孤独化の感情」を生み、自然的有機体的関係からの個人の解放を生んだとするマックス・ウェーバーの説を受け入れながらも、予定説が生んだ他の側面、神の選民の連帯性、信仰共同体という新しい有機体的関係の成立を強調する。更に著者は、オウエンの「信者集団としての教会」は、従来から分離派的なものと考えられて来たが、オウエンはセクト型の教会観に立ちながら、しかもなお分離派ではないとするのである。オウエンにとって、教会の純潔を保ちつつ、非分離の立場を貫くことは、全国の教会をすべて純化することによってのみ達成される。ここから、神の選民がその純潔を守るために孤高の場に逃れる分離派には見られない「戦闘的教会」が生れて来ることになるのである。

エミール・ジャム著
久保田明光・山川義雄訳

『経済思想史』

著者はこの本の序文のなかで、この書物は何よりもまず経済学士の学士号を得るために準備している学生を対象としている、ということを書いており、いわゆる、オーソドックスの教科書とでも言うべきものかとも思われる。だがこの著者はフランス人であり、私たちは彼が言うことを真に受けることは必要ではないし、またそうしてはならないときがある。一般に教科書及び参考書のたぐいのものは、味気がなく、また何か商業的、あるいは中途半端な感があり、とくに、経済・社会科学の分野においては、そのような書物をつかう場合には、一時的、便宜上のみ使用することがしばしばである。

この本の著者エミール・ジャムは一八九九年南仏のピュイ・ド・ドーム県のリオムに生れ、一九三八年パリ大学法学部教授に就任、一九四八年以来エコール・デ・オート・ゼチュエード・コメルシャル教授、一九五〇年以来エコール・プラティク・デ・オート・ゼチュ

ド教授でもあり、貨幣経済理論、経済理論史、経済思想史、労働経済学等の講義を行ってきており、彼の主張はフランス・ソシオロジスムにつらなるものであり、この書物においても、余りにも一面的であるとか、あるいはセクト的であるとか、というようなものではなく、一応どこからでも、「経済思想史」、広い意味での、「経済学」を研究し、あるいは前後の諸関係を固くすることなしに見直してみる、という気持にさせる。

著者はこの書物を六篇に分け、その第一篇を、一般的体系化のすぐれた試み以前の経済思想——一七五〇年以前、として、その第一章を古代思想、第二章、中世、第三章、重商主義、第四章を、自然法に対する信念、とし、第二篇を、古典主義学派、とし、その第一章、フイジオクラシー、第二章、アダム・スミス、第三章、イギリス古典主義者、第四章、古典学派のフランスの支流、第五章、古典主義諸学派の評価、とし、第三篇は、古典主義諸学派に対する最初の反動として、その第一章、シスモンディ、第二章、価値理論および分配論に関する若干の新しい説明、第三章、資本主義の最初の批判、「空想的」社会主義、第四章、歴史学派とその追隨者、第

五章、経済「恐慌」に関する最初の論議、第六章、スチュアート・ミル、第七章、カール・マルクス、として、第四篇には、新古典主義諸学派、について述べ、その第一章、先駆者、第二章、「新古典主義」の開拓者、第三章、新旧古典主義理論の調和の試み。アルフレッド・マーシャル、第四章、アメリカの限界主義学派、第五章、限界主義学派、第六章、L・ワルラスの後継者、第七章、新古典主義者と社会問題、として、次の第五篇には、新古典主義をこえて（一九〇〇—一九三〇年）、とし、その緒論には、T・ヴェブレン、O・シュパン、F・シミアンについて述べており、第一章、マルクス主義の発展、第二章、貨幣的均衡にかんする諸研究、第三章、競争の分析、第四章、均衡への障害とそのおこらうべき欠陥、第五章、自由主義の反撃、について述べ、最後の第六篇には、成長と停滞、として、その第一章、ケインズの思想、第二章、資本主義と共産主義の運命、第三章、新しい分析の諸方法、第四章、短期動学の推蔽のもるもの試み、第五章、成長の理論、第六章、経済単位の行動、と結んである。

このように全体を通してみると、著者は様

々の角度から、経済思想の流れを観察し、分析しており、その緒論でも述べておるが、経済学研究においては、理論と教義は密接に結びついており、それらの観察の整理、体系化、価値判断および改革の提案等は区別することができぬほどからみあっており、経済科学を「理論」の研究に局限することの誤りを指摘している。また、経済科学を狭く限定してはならない、という彼の考え方は、経済行為の動機と目的の多様性、組織形態の多様性、いわゆる経済外的な変化が経済におよぼす影響を考えてみなければならぬ、といひ、これら様々の動機、経済構造の核心をなすものは人間であり、経済科学を研究するにおよんで、人間諸科学との間に有機的な生きた絆がなければならぬ、と結んでいる。（岩波書店・B6・上・昭和四〇年十月刊・七〇〇円・下・昭和四二年一月刊・五〇〇円・上下・六三一頁・索引・一八頁）

—原田敏彦—

堀江保蔵編

『海事経済史研究』

本書は、海運、造船、港湾、貿易などを軸にした海事に関する経済史の研究であり、日本経済史、東洋経済史、西洋経済史をテーマ別に横断的に編纂した興味ある試みである。そして同時に、堀江保蔵教授の還暦記念論文集ともなっている。

全部で九つの論文が納められている。

- I 明治十年代の海運業（堀江保蔵）
- II 北前船の近代化とその背景（関順也）
- III 日本における近代港湾の生成（佐々木誠治）
- IV 日本近代造船業の展開（井上洋一郎）
- V 北洋漁業の近代化における企業と政党の関係—日ソ漁業交渉と島徳事件—（三島康雄）
- VI 李朝時代の海運業—その実態と日本海運業の侵入—（安乗治）
- VII 西印度商船とセビリヤ貴族（木田和男）
- VIII 重商主義とイギリス造船業の発展（角山栄）
- IX ビクトリア中期の自由貿易運動—「自由貿易の帝国主義」論に対する覚書—（佐藤明）

プロトチしているのがV章である。

VI章は、朝鮮の開港（一八七六年）前の租税舟運や不定期海運業に、やがて日本資本の侵入がある過程を分析しているユニークな研究である。

IV章は、十六世紀終り頃までのスペインのセビリヤにおけるセビリヤ貴族の海洋貿易に関する投資活動について述べている。スペインの新大陸貿易史である。

IV章は、一六六〇年のイギリスの航海法の背景及び成果を分析し、それが「巨大集中マニユ」としての海軍造船所の発展や、ニューイングランド植民地の造船業の発展を含むイギリス海運業・造船業にいかに関与を促進したかという問題である。

IX章は、これまでの論文とやや視角を変えてビクトリア王朝時代の自由貿易運動の思想的内容をめめた性格規定である。

全体に土着の資料の駆使から議論が展開され、海事経済史研究という視角が新鮮な、また特に全般にも言えることながら北前船や朝鮮の海運などすぐれて且つ非常に意義と興味の深い研究であると思われる。（海文堂・昭和四二年一月刊・A5・二六一頁・一二〇〇円）

—栗本慎一郎—